

# 地域の子どもをゆたかに育てる教師の働く条件 〜地域と学校を結ぶ教育文化活動と教育諸条件〜

内山雄平

はじめに

佐渡島では、歌舞伎、能、狂言など伝統芸能が古くから地域の文化として育まれ、継承されてきた。しかし、1960年代（昭和35〜45年）にかけての、いわゆる高度経済成長期を境に佐渡島の人口が急速に減少し、そのため、伝統芸能を受け継ぐ後継者が不足し、その維持さえ困難な状況に陥った。現在でも、毎年千人の人口が減り続けている。

この後継者難に直面した佐渡島で、長年に亘って小中学校の教師たちが地域の持つ力を生かし、島内各地域に残る優れた伝統芸能を学校に取り込んで、これを受け継ぐ子どもの教育（育ち）をすすめてきた。その

実践について若干触れ、それが可能となる教育諸条件のうち学校規模に絞って考察してみたい。大規模校には佐渡島のような伝統芸能をとりいれる実践は指導者の有無だけでも不可能であろう。

## 1、地域の伝統芸能を学校教育活動に生かす

研究所はここ数年、佐渡の大合併にともなう学校統廃合問題と取り組んできた。その研究視点として地域と学校がどのように結びつき、子どもの成長発達を促してきたか、その問題を追究している（『にいがたの教育情報』101号、103号に収録）。

これまでの調査から、地域の伝統芸能を地域と学校と結んで子どもたちに伝承している事例のいくつかを

紹介してみよう。

### 片野尾の「子ども歌舞伎」

長らく途絶えていた片野尾歌舞伎は、地元の経験豊富な古老たちの尽力で「手づくり文化の歌舞伎」として、1978（昭和53）年、復活公演に成功した。その後の「大人歌舞伎」の公演を見た、片野尾小学校長は、子どもたちに人前での発表力を身につけさせたいと思ひ立ち、80（昭和55）年文科省の学習指導要領改訂で導入された「ゆとり」の時間に「子ども歌舞伎」をとり入れた。

演目および配役は、担任、校長、教頭、保存会が話し合いで決め、5・6年の児童たち（9人）が6〜7時限に練習する。1981（昭和56）年以降、「大人歌舞伎」と隔年に実施。一の谷ふたば軍記、須磨の浦の段、絵本太閤記、尼崎庵室の場などの演目を同小学校体育館で2001（平成13）年、両津市前浜小学校に統合するまで公演を続けた。1985（昭和60）年、両津市で開かれた「全日本子どものための舞台芸術祭」特別記念公演では、人間国宝・大会会長の中村歌右衛門さんと共演する機会もあった。

岩首小・野浦小とともに前浜中学校に入学する片野尾小の生徒は、挨拶や返事がよく人前で堂々と話が出来、この歌舞伎学習を体験した児童の世代の多くは、地元に残っているという。

### 小倉の「子ども鬼太鼓」

小倉地区の鬼太鼓が消滅の危機にあつた1974（昭和49）年当時、小倉小学校の一女教師が伝承芸能を残そうと地域に提起し、保護者でもある大人鬼太鼓のメンバーの協力を得て、子どもたちが練習に励むようになった。同年地区の新嘗祭当日、近くの物部神社に子ども鬼太鼓（3・4年生）を奉納した。新潟日報にも報道されるなど地区の評判となり、学校として正式に教育課程に位置づけ放課後の課外活動として鬼太鼓を教えるようになった。

子ども鬼太鼓は、赤鬼・青鬼2匹の鬼が笛と太鼓に合わせて向かい合って勇壮に舞い、間に面をつけない子どもが助っ人として踊る。夏休み、赤泊海岸での鬼太鼓合宿などで、厳しく指導されても、「大きくなったら、とうじえむ（屋号）のあんちゃん（兄さん）みたいに踊りたい」という気持ちが自分を支える。

その後、「総合的学習時間」も活用され、現在、年間を通して月2回の練習を教育課程内の時間と、時間外（土曜日）をあてて鬼太鼓育成会と教職員が協力して実施している。

1975（昭和50）年以來、小倉例祭での物部神社奉納、地区文化祭、安寿天神祭、長谷観音祭など数多く出演している。

### 真野の「萬流狂言」

1979（昭和54）年、萬流狂言が伝承されていることが狂言に関する専門家によって確認され、当時の真野町教育委員会を中心に保存・後継者育成に力を注ぐことになった。これを機に真野中学校では、1981（昭和56）年「郷土の芸能を学ぼう」と、教育委員会に働きかけて、講師（遠藤信一・若林義太郎両氏）を招き、必修クラブ活動として「萬流狂言クラブ」を発足させた。

その後、2002（平成14）年、学習指導要領の改訂によって、「総合的学習時間」が設けられ、必修クラブがなくなった。「萬流狂言クラブをなくさないで」との生徒の声を受け、教職員がアイデアを出し合い、

「総合郷土」として、文弥人形、和太鼓、竹細工等を加えて存続させることとなった。無論、地元の優れた指導者の協力を得てのことである。

萬流狂言を選択した生徒は、3年間継続して学び、学校の文化祭、「総合郷土」発表会を始め、真野地区芸能祭、高校の芸能祭などに上演する。関東甲信越代表として出場した「全国子ども民俗芸能大会」では、上演中に演技に反応して、会場から一斉に大きな笑いと拍手に包まれ、学校などの発表会では考えられない体験を味わった。高校に進学した生徒の中には、学校を説得し狂言クラブを新設させるほどの卒業生も現れた。

### 高千の「文弥人形」

佐渡市立高千中学校（旧相川町）は、1982（昭和57）年、文弥人形芝居の盛んな矢柄地区に位置する外海府中学校と学校統合した。その外海府中学校では統合前の1966（昭和41）年、当時の教頭と教員の発案で矢柄地区の伝統芸能「文弥人形」を継承させようと、文弥人形遣い、「矢柄繁栄座」に協力をお願いして、郷土芸能クラブとして創立された。

この文弥人形のクラブは、統合後の高千中学校に引

き継がれ、現在「総合的学習時間」にコース選択として伝統芸能「文弥人形」を設定している。原則として3年間継続して所属し、遣いの配役は3年生を中心に生徒たちが決め、「語り」と三味線の入っているテープを流して練習する。演目は孕常磐（五条の橋）、粟津ヶ原合戦・巴御前奮戦の場など。

遣いの指導者として、重要無形文化財保持者の故濱田守太郎氏が長年携わっており、その後継者が現在指導に当たっている。人形の操り方や表情の出し方を習い、練習を積み上げていくうちに、人形の表情に変化が現れてくる。この表現力が備わってくると生徒たちは意欲的になるが、2く3人で操る共同行為だから、呼吸が合わないとうまくゆかない。この成果は、高千芸能祭、文化祭、生涯学習フェスティバル、相川芸能祭などに披露する。

## 2、地域の伝統文化を学校に取り込めた背景

このように、郷土に根付く芸能文化を地域に働きかけ、学校教育に取り組んで伝統芸能を継承する子どもたちを育ててきた。その背景を探ってみよう。

### (1) 恵まれた自然と豊かな伝統文化

佐渡島は、その面積が東京23区の約1.5倍の854 km<sup>2</sup>、離島では沖縄本島に次いで2番目に大きい島である。中央に国中平野をはさんで、北に大佐渡山脈、南に小佐渡山脈が縦走している。対馬海流の影響で温暖であり、植物の境界線とされる北緯38度線が島の中央を横切ることから、日本の南限と北限の植生が分布し、「花の島」または「日本の縮図」とも呼ばれる。美しい海岸線や森林、田園風景など豊かな自然に恵まれている。

古くからの史跡など歴史的文化遺産も数多く残っており、どの地域でも伝統芸能、工芸が伝承されている。能（独立型の能舞台<sup>35</sup>）、狂言、歌舞伎、人形芝居（文弥人形・説教節・のろま人形）、鬼太鼓（120組）など豊かな伝統芸能が引き継がれ、佐渡島で生きる人々の郷土愛や意欲を育んできた。

学校の周辺では、自然に恵まれた風土と、古くからの伝統芸能が、年間を通して各集落の神社の祭礼での奉納や、地区の芸能祭などで行われてきた。

### (2) 小中学校の学級規模の推移

次に、教育をすすめる学校の規模はどうか。第1く

図1 佐渡島小学校の学級規模別校数割合

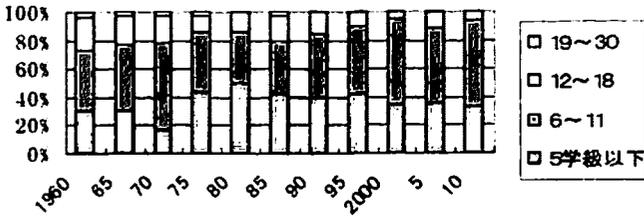


図2 県公立小学校の学級規模別校数割合

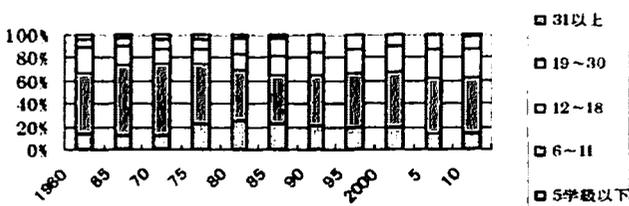


図3 佐渡島中学校の学級規模別校数割合

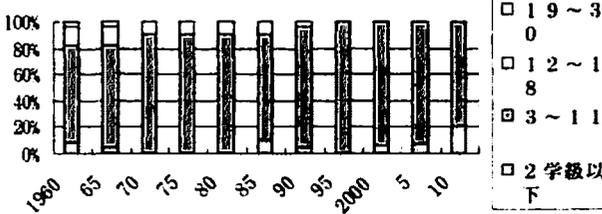
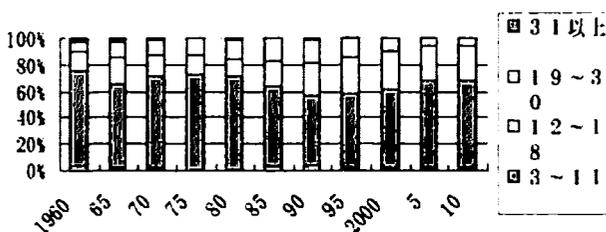


図4 県公立中学校の学級規模別校数割合



4 図は、佐渡の小・中学校の学級規模別校数の割合を、高度経済成長期の始まる1960（昭和35）年以後、新潟県のそれと比較を試みた「過小規模校（小・5学級以下、中・2学級以下）、小規模校（小・6〜11学級、

中・3〜11学級、適正規模（小・中12〜18学級）、大規模校（小・中19〜30学級）、過大規模校（小・中31学級以上）は文科省の学級規模区分による（分校を除く）」。佐渡島の小学校の学級規模は、5学級以下の過小規

地域の子どもをゆたかに育てる教師の働く条件

模校と6〜11学級の小規模学級合わせて約8割前後の校数であり、2000年以降は9割を占める。新潟県のそれは7割前後で推移している。

一方中学校は、2学級以下の過小規模と3〜11学級規模の校数を合わせ、1990年まで9割であり、それ以降は100%である。新潟県は全体として2学級規模は少なく、3〜11学級は6割前後となっている。

なお、佐渡は小中学校とも過大学級といわれる31学級規模の学校は、少なくとも1960（昭和35）年以降は存在しない。

新潟県全体の小中学校の学級規模から見ても、佐渡は小・中学校とも小さな規模の学校であり、子ども対教師の比率を比較すれば恵まれた教育環境といえよう。

さらに、佐渡島の1学級当たりの児童数と生徒数および教員一人当たりの児童・生徒数を年度別に新潟県（佐渡島も含む）と比較すると、表1になる（注）。

（注）教員一人当たりの児童・生徒数Ⅱ児童・生徒数÷本務教員数

本務教員数は校長・教頭・教諭・助教諭・養護教諭・栄養教諭・講師の計

表1 学級当たりおよび教員一人当たり児童・生徒数

	1学級当たり児童・生徒数				教員1人当たり児童・生徒数			
	小学校		中学校		小学校		中学校	
	佐渡島	新潟県	佐渡島	新潟県	佐渡島	新潟県	佐渡島	新潟県
1960	36.3	39.7	41.8	43.1	31.1	32.9	26.0	27.0
65	26.8	32.5	37.9	39.7	21.0	26.0	21.5	23.7
70	23.7	28.9	31.5	35.2	18.0	22.5	16.7	19.5
75	23.4	29.0	28.8	35.0	16.1	21.5	14.1	18.5
80	22.3	29.8	27.6	35.7	15.0	21.6	12.6	18.7
85	22.2	30.1	28.2	36.7	14.7	21.5	12.8	19.4
90	21.5	27.6	26.0	34.6	13.8	19.1	11.8	18.3
95	20.1	26.4	23.7	32.8	12.2	17.4	10.4	16.7
2000	17.6	24.9	23.7	32.0	10.6	16.1	9.7	15.6
5	15.3	23.4	22.6	30.3	9.3	15.4	9.3	13.7
10	15.0	22.2	19.6	28.3	8.9	14.5	8.1	12.7

最初に、一学級当たりの児童数は、1960（昭和35）年当時、佐渡島は、すでに県平均より少なく36・3人であり、常に県の児童数より下回って推移している。2010（平成22）年では、その差7・2人である。中学校も同様に県全体より少ない。

また、教員一人当たりの児童・生徒数も、県全体と比較して少なく、しかも年々県との差が開き、より少ない人数の指導にあたっていることがうかがえる。

児童・生徒数の少ない学級は、教師は「ゆとり」をもって児童・生徒の指導にあたれる。久富論文（17く24頁）が指摘している教員の長時間超過密労働を強いられている現在とは違い、少なくとも、地域の伝統的芸能文化を学校が取り入れ始めた昭和40年代から50年代にかけて、教師のゆとりが、地域とのつながりを深め、優れた郷土の文化を学校教育に生かし、現在まで継続することができた背景と考えられるのである。

### 3、まとめ

以上のように、佐渡島の優れた伝統文化とこれを地域と共同して子どもたちに伝えてきたその背景を考察してきた。小さな学校の児童・生徒は、主人公となる

多くの出番がある。伝統芸能を受け継ぎ、地区の例祭芸能祭などで上演することもその一つだ。子どもたちにとつて上手に演じ評価されるうれしさは、明日への励みとなり、人間的成長に結びつく。

そして、地域と結びついた教育活動を可能とし、展開できるのは、教師一人当たりの児童生徒数が少ない方が、優れた教育環境であることを、佐渡の伝統芸能の教育実践が示しているといえる。

言うまでもなく、教育実践を成立させる諸条件は多岐にわたり、そのすべてを明らかにすることは難しい。しかし、小規模な学校で教師に自由があり、地域の人の協力を得られるならば、ここにあげた佐渡のような実践は可能であろう。そのことは今日いつそう求められている学校教育再生の道である。

#### 〔参考資料〕

・『かざしま』

佐渡市立片野尾小学校閉校記念誌（平成19年3月）

・「片野尾歌舞伎公演年度別実績表」

片野尾歌舞伎保存会（平成14年4月）

・『小倉子ども鬼太鼓25年および35年のあゆみ』

畑野町立小倉小学校（平成12・17年）

・真野中学校の鷺流狂言について

佐々木卓郎（『佐渡地理誌研究』7号2009年10月）

・『佐渡葛流狂言研究会のあゆみ』

佐渡葛流狂言25周年記念誌（平成19年3月）

・『ときの島よりこんにちは』

学校図書（2006年7月）

・「新潟県統計年鑑」

新潟県企画調整部統計課（1960～2011年）

・「学校要覧」

新潟県教育委員会（1960～2010年）

（うちやまゆうへい・研究所事務局長）



## 久々の上京

久々に上京した。JR東京駅の構内は、何時行ってもどこかで工事をしていて戸惑うことが多い。おまけにこの日は山手線で事故があったとか、通勤時間帯には間があるのに通路はごった返していた。人波を掻き分けてようやく中央線のホームに上がり、発車寸前の快速電車に跳び乗った。もちろん満席であった。新宿まで15分、昔乗りなれた路線だから立っただけでも別に苦痛ではない。右手で吊革にぶら下がって左手でシオルターバッグを腰のところで支えて、前に座った女性の肩越しに車窓を眺めて揺られている。すると隣の男がすっと立って、ぶっきらぼうながら「どうぞ」と席を空けてくれた。四十代くらいの着馴れたスーツ姿で分厚い封筒を抱えている。思わず「大丈夫です」とは答えたが、後はひょうひょうと吊革にまっついている男の好意に甘えて腰掛けた。ふだんの研究所への行き帰り、かなり混んだ電車に乗ることもしばしばある。期待しているわけではないけれども、羽越線ではここ数年経験したことのない、私にとってはひとつの出来事であった。

（かた）